

地球温暖化とライチョウ

生物多様性班 堀田 昌伸

地球温暖化により、生きものの季節性や分布に変化が生じていることが多く報告されています。今後も温暖化が進行すれば、そのような変化はより大きくなり、ある種は絶滅あるいはその危険性が增大すると予想されます。高山帯には、氷期に北からやってきて、最終氷期以降暖かくなるにしたがい、他から島状に隔離され取り残された生きものがあります。温暖化が進行すれば、そのような生きものたちはより高いところしか住めなくなり、絶滅の危険性がかなり高くなります。その代表的な生きものが、南北アルプスやその周辺の高山帯だけに生息する日本のライチョウです。



ほかの雄がなわばりに侵入していないか見張りをする雄

ライチョウという種は北半球北部のツンドラ地域を中心に広く分布しています。ライチョウの仲間は16～19種いますが、その中でもライチョウは最も寒い気候に適応した鳥です。日本のアルプスやヨーロッパのアルプス、ピレネー山脈などに、氷期に南下してきた集団が隔離されて分布しています。その中でも日本の集団は最も南になります。

環境保全研究所では、静岡ライチョウ研究会の協力を得て、ライチョウの世界最南端の生息地である、南アルプス南部イザルガ岳から茶臼岳のライチョウについて1997年からモニタリング調査をしています。イザルガ岳は1～2つがい、茶臼岳は2～4つがいがあります。集団としてはかなり小さく、それより北の集団との関係を含め今後も調査を継続していきます。

日本のライチョウは信州大学や富山雷鳥研究会、大町山岳博物館などにより、1960年代から調査がおこなわれ、その生息数や分布の状況がほぼ明らかになっています。近年、南アルプス北部の北岳から農鳥岳周辺ではかなり個体数が減少しています。



ライチョウの母親とヒナ

日本のライチョウはほぼ年間を通して高山帯にすみ、繁殖期は背の低いハイマツがパッチ状に分布し、その周りにガンコウランなど矮性の低木が優占する風衝地を好んで使います。ハイマツ林は彼らの営巣場所であるとともに捕食者からの逃避場所にもなっています。つまり、温暖化によりハイマツが生育できなくなれば、ハイマツを利用するライチョウにとって死活問題になります。独立行政法人森林総合研究所の研究チームが現在の気候情報といくつかの気候変化のシナリオ、植物の分布情報を用いて、2031～50年、2081～2100年のハイマツの生育地の予測を行っています。それによれば、南北アルプスのハイマツ生息地はかなり減少して部分的に残る程度とされ、ライチョウもかなり減少することが予想されます。しかし、現在の予測精度はかなり粗く1kmメッシュ程度です。高山帯というよりローカルな予測をするには、より解像度の高い解析が必要になると考えられます。現在、環境保全研究所では森林総合研究所とともに、将来のライチョウの分布がどうなるのかについてより精度の高い予測に取り組んでいます。



矮性のハイマツ林がパッチ状に分布するライチョウの生息環境。南アルプス南部・茶臼岳の北斜面。